

力をあわせて共に

住職

今年の五月、自国の経済発展に不利だということで、アメリカのトランプ大統領が「パリ協定」から離脱することを表明しました。これに対してドイツ、フランスなど主要な国々の首脳は、アメリカのあり得ない発言に驚きこれを批判しました。

地球は今、排気ガスの影響で、温暖化がすすみ危機的な状態になっています。南極の氷がとけ、異常気象で干ばつや洪水などが地球のあちこちで発生しているし、また、生物、植物の生態系にも影響しつつあるようです。各国が力を合わせて、排気ガスの発生を抑え軽減するための方策を議論し、協定を結びました。二〇一五年、この会議がパリで行われましたので「パリ協定」と呼ばれています。国連加盟国のうち主要国を含むほとんどの百九十六ヶ国が、賛同し署名している協定です。



排気ガスを大量に発生させ続けているのは人間です。サルやクマではありません。我々人間は産業革命以来、科学技術の発展によってその恩恵に浴してきました。しかし、科学産業の発展は、空気と水を汚すという事態をまねき、経済至上主義を助長してきました。気づいたときには、地球のもつ自浄能力をはるかに越える状態です。共に生きてゆく基盤である地球が危ない。これに気づいたものは、前向きに対策を練ることの重要性を認識しています。アメリカは、中国について世界で二番目に多く排気ガスを出している国ですから、批判されるのも当然の

ことです。アメリカの立場は、地球全体のことよりも自国の経済発展を優先するものです。どの国も自分の国が一番大事です。同時に自分の国を成り立たせている地球は、もっと大切なはずです。しかし、その危機を面前のこととして受け止めにいくのも人間の悲しい現実です。

蓮如上人が「われや先ひとや先、今日とも知らず明日とも知らず」と仰せられますが、「そうかもしないけれど、まだ大丈夫、今日や明日のことではない、ひとや先、ひとや先」としか受け止められず、「まだ、明日がある」つもりで、日々を四苦八苦しながら過ごしている自分の姿を見せつけられるといううです。

私たちの社会は「濁っている世界である」（濁世）と仏さまは仰せられます。物事がハッキリと見えない。これは泥で濁った水の中にいるような状態です。濁つた水のはいったバケツの底は見えません。また「明かりの無い世界である」（無明）とも仰せられています。本当の自分を知らずに、空想の自分に執着して生きているということです。暗闇では、自分の服装も、周囲も、足元もよくわかりません。頭の

中で思い込んだ自分にしがみついて生きています。人間の行動は物事に執着することから始まり、好き嫌いの感情、損得勘定、義理人情を軸にして回っているようです。人にはそれぞれの価値観があります。つまり人間が自分の力でする判断には、プラスの面とマイナスの面とがあるということですから、だれが見ても「百点満点だ」という判断はできません。

そうであるなら、どう行動すればよいのでしょうか。これを自分と他人との関係で見てみましょう。そのことが自分のタメだけなら他人にはマイナス、他の人のタメだけなら自分にはマイナスになる現実があります。しかし、必ずしもそうではない。「人間万事塞翁が馬」ということもあります。子や孫などの次世代のことも含む長いスタンスで考える。さらに現状を深く幅広く知る。なによりも仏様の智慧による時、「あなたもわたしも共に」プラスに成れる立場もあるようにうかがえます。仏教の「自利・利他」（自分も他人も幸せ）というのもそこにあるようを感じられます。何事も、お念仏もうす生活の上に受け止めさせていただきましょう。

安芸教区の方々との「ご縁」

中川 さなみ

三月十日（金）、安芸教区・教雲寺の皆様が、伝灯奉告法要の帰路の途中、信行寺に参拝されました。昨年十月、安芸教区志和組、百名の方々に続いての有難いご縁でした。

住職の広島弁で和やかに始まりました。震災を実体験された時の話を熱心に聴いておられました。広島弁での体験談は、真に迫って、いつにも増して心に染み入りました。安芸教区の方々も災害に対する危機感をより一層深められた様子でした。短い時間でしたが、お茶の時間もリラックスして頂けたかな、と思います。「広島弁がよかったです。」とお帰りの時、そつと言つていただきました。同じ浄土真宗の同朋であるということ以上の親しみを私は感じさせていただきました。

もう一つの大変なご縁は、ビーエス観光の「佐古田さん」です。一昨年の「本山念佛奉仕団」でお寺の紹介スピーチがあり、「信行寺の御院さんは広島



弁で、とても好評です。安芸教区の皆様、一度お立ち寄りください。」と発表しました。すると、その場におられた添乗員の佐古田さんから、その日のうちに坊守さんに打診があり、一年後の昨年十月の参拝、今年三月の参拝へとつながったのです。「佐古田さん」の素早い行動は、「伝灯奉告法要」という大切な時期に思い出に残るご縁がまた一つ出来、有難いことでした。



伝灯奉告法要にお参りさせて頂いて

新田 光美

要に「一緒にでき、有難いことでした。」

桜の花があちらこちらに咲き誇っている春の清

新しい季節に、伝灯奉告法要に参拝させて頂けるということは、どんなに有り難いことでしょうか。この日がすごく待ち遠しかったものです。

主人はこの度、初めて西本願寺に参拝させて頂きましたので、何もかもが珍しかったと思います。私がびっくりしたことは、主人がお寺に行つても声に出してお勤めしたことがないのに、法要が始まつて正信念仏偈を声に出して唱えていたことです。あの厳かな太鼓のリズムと雅楽との音調が本当に素晴らしいものでした。主人もあのリズムに乗つたのだと思います。後で、「よかつたなあー」と言つていましたから・・・。

法要は、阿弥陀堂と御影堂の両堂で勤められました。最初は、前門さまが阿弥陀堂、御門主様が御影堂に入れられ、法要の中ほどで両門様が入れ替わりました。（これを転座というそうです。）このような法

を見学させていただいた折には、主人は「すごいなあー」の連発でした。

このような素晴らしい法要に参拝できる「縁は、なかなかないことです。本当に主人と一緒に参りできて、心からよかつたと思いながら帰つてきました。

しばらくあの正信念仏偈の音調が頭から離れなくて、独り余韻に浸つていました。

南無阿弥陀仏
合掌



主人の死をみつめて

吉谷 洋子

梅のつぼみが咲き始めた平成二十九年二月十二日、主人がお浄土へ旅立ちました。平成二十七年九月、二年間受けていなかつた健康診断を受け、癌と向き合うことになりました。

すぐに中央市民病院で再検査を受けた結果、「胃癌でステージ4、肝臓に転移をしているので手術はできないが、抗がん剤治療をすると余命半年が一年に延びる可能性があります。」との告知。私は身体から力が抜けていくのを感じましたが、今後がんに 対してどう立ち向かっていけばよいか、気持ちを切り替えました。癌になつても治療を受けず、自然のまま我家にて在宅治療で過ごし、癌で苦しむような時は、痛みを和らげる治療をすると言つていた以前からの主人の思いを尊重し、夫婦で歩み始めました。年が明けた平成二十八年桜の花が咲く頃、家族十人で城崎温泉旅行を楽しみ、月二回は我家での食事会、子供達も多くの思い出作りに心配りをしてく

れました。夏を迎える頃から食欲がなくなつてきましたので、栄養補助食品で補いました。大好きなお酒は亡くなる半月前まで飲めていました。本人も満足だつたと思います。

二回目のお正月を迎え喜んでいましたが、今まで一人で入っていたお風呂が入れなくなりました。息子の手助けを得て、毎日湯船に浸かり体を温め、主人も喜んでいたのですが、それもできなくなりました。訪問入浴、往診、訪問看護と、行政の力を借りながら、介護を続けることができました。

旅立ちの時、家族全員で「お父さん今までありがとうございました。」の声掛けができました。最後まで痛み、苦しみがありませんでしたので、穏やかでとても美しい顔を見送ることができました。

癌と宣告を受けて一年六ヶ月、家族全員でサポートできた事は、私の財産となりました。今は阿弥陀さまに手を合わせ、四十七年間の結婚生活を振り返りながら、思い出と共に、一日一日前に向かって過ごせることに感謝しています。

第十六回 門信徒定期総会

多田 清子

「親鸞聖人 神戸護法会」のご案内

平成二十九年四月二十二日（土）門信徒会「第六回定期総会」が行われました。

新田泰三会長、逢坂光豊総代から「この会を大切にし、ますます発展していくように」とのあいさつがありました。二十八年度の事業報告（寺報、旧跡参拝旅行、夏季特別法座、念佛奉仕団、みやび会コーラス部、花まつり）と会計報告、及び二十九年度事業計画案、会計予算案の質疑応答があり、承認されました。

その後、長年にわたる本山念佛奉仕団の参加活動の写真のスライドショーがありました。第一回目は三十六年前、昭和五十六年十月八日だったそうです。次々と映し出されるなつかしいお顔、若かりし頃の皆様の元気なお姿に思わず笑みがあふれ思い出話に花が咲きました。

そして住職の法話を聴聞し、参加頂いた門信徒の皆様に感謝しつつ閉会いたしました。

場所 信行寺 礼拝堂

日時 毎月第一日曜日（八月は休会）
午後一時より四時まで

日頃の疑問を考えよう

Qもうすぐお盆ですが、地域によって時期が違うのですか？

Aそうです。八月の十三日から十六日のところが多いですが、七月のところもあります。昔は農作業で七月が忙しかったため、月遅れの八月の方が多くなつたとも考えられます。

Qそもそも、お盆とは何ですか？

Aお盆、正しくは「盂蘭盆（うらぼん）」といいます。

盂蘭盆經というお経があり、次のように説かれています。お釈迦さまの弟子の目蓮尊者が、餓鬼道に落ちた亡き母親の苦しみを知り、お釈迦さまに相談されました。お釈迦さまは、七月十五日に母のために僧侶に供養をするようアドバイスされました。この物語が親を大切にする事を尊ぶ中国や日本に受け入れられ、広まつたようです。

Qお盆には亡くなつた人が帰つてくるのですか？
日本では昔から死者の靈がこの世に戻つてくると信じられてきた風習がありました。お盆とは仏事と

いいながら、様々な信仰と風習が混ざり合いながら今に伝わっています。そして、先祖の靈を家に迎えて、お供えをし、読経などの供養をしてあの世へ帰つてもらうという考えが定着したようです。浄土真宗では、仏さまはいつでもどこでもいらっしゃるものであつて、迎える、送り帰すなどという考えはありません。

Q淨土真宗で、お盆はどのように迎えればよいのでしょうか。

A淨土真宗では、阿弥陀如来の本願の力によつて、故人は必ずお淨土に往生します。餓鬼道に落ちることはありません。お盆のいわれにちなみ、先祖や父母などに対し敬いの心を形で表すことが大切です。私達は、餓鬼道で苦しまねばならぬほどの子育ての厳しさの中でお育て頂いたのです。親、祖先の「恩を偲ばずにおれないのがお盆の心であります。そういう思いで家族そろつておつとめに会い、お念佛しましょう。





信行寺行事予定とご案内

◆本堂納骨お盆法要

八月十六日（水）

午後二時より 本堂にて

◆夏期特別法座

八月十九日（土）

午前十一時から午後三時

信行寺 本堂・礼拝堂にて

◆秋の彼岸法要

九月十六日（土） 高田 慈昭 先生

十七日（日） 住職

両日とも二時より 本堂にて

◆西大谷納骨参拝

十月十五日（日）

バスで一緒いたしますので、ご参加希望の方はお早めにお寺にお問い合わせください。

早いもので今年も、半分が過ぎました。いろいろなことがあったなあ、と振り返ります。

四月には、花まつりの法要をお勤めいたしました。いたやど保育園の園児さんと門信徒の子供さん達（約60名）がお参りして、賑やかで楽しいひと時を過ごしました。また、藤井暁子さん（地域で十五年公演されている）に腹話術を披露して頂き、大人も子供も大笑いしました。地域の皆様もお寺に縁ができることで、仏教の発展に繋がりましたら、誠に幸いです。また、熊本地震への支援の一つにと皆様にお願いしました讚仏偈の写経を本堂に納めました。

もうすぐ、暑いお盆です。

懐かしい方々への感謝を家族やお知り合いの方々と偲び、語らいながら迎えましょう。

米田悦子

